

川に学ぶ楽しさと怖さ

日本赤十字社 参与 三井 俊介

令和4年の幕が開けました。練馬区民、同在勤・在学の皆さんは年頭をどのように迎えられたでしょうか。この2年近くの間、世界中/日本中を恐怖に陥れてきた新型コロナウイルス感染症について、わが国においては昨年8月下旬頃までは日毎新規感染者の右肩上がりの勢いが止まりませんでした。しかも医療施設への入院が必要な容態に陥っている方を受け入れるべきベッドが満床という状況が続き、自宅療養を余儀なくされ(そのまま自宅であるいは入院後に)亡くなられた方もおられました。理不尽な死にやりきれない思いを持たれたご家族はもちろん、他人事とは思えないという方も多くいたことと思います。

新型コロナワクチンの接種が進んだこともあり、秋以降、日々の新規感染者数の減少傾向が続き収束かという期待感を持ち始めた矢先、オミクロンと名付けられた変異株が出現して心配は尽きません。

さて、冬場のこの季節ではありますが、「河川」に対する理解を図ってみましょう。これまでも、この「水夢」紙面で紹介された「川遊び」、これは練馬区水泳連盟(練水連)が毎年9月初旬に青梅市(多摩川・柚木の河原)で開催をしてきたものですが、コロナ禍の影響によりこの2年間は中止を余儀なくされています。この事業(行事)の意義は、日常生活圏に近い川(流水)での楽しさと怖さを自らの身体で体験してもらうことにあります。楽しさの例として、ライフジャケットやヘルメット等を身に着けて仰向け姿勢で頭を上流に、足を下流に向けて川を流れて行く爽快感、目に入る景色の新鮮さなどを挙げる事ができます。ちなみに、水辺活動関係者はライフジャケットを水辺のシートベルトと呼ぶことがあります。怖さの例では、川べりで遊んでいて履いていたサンダルが流され、それを追い掛けているうちにバランスを崩し自分が流され溺死に至る事故が一例に挙げられます。

警察調べでの一昨年2020年の水難事故/事件に係る数字には、それまでとは違った様子が見られました。水難総件数1,353件を47都道府県別に見てみると、最多は沖縄県の85件、次いで2位が東京都の73件、水難者数は沖縄県に次いで2位が東京都の83名、死者数に至っては最多が東京都の47名でした。これまでものおよそ半世紀の間に東京都がワーストワンで

あった記憶はありません。背景に何があったのか?ここからは推測の域を出ませんがお許しを願います。

警察では、水難が起きた場所を海、河川、湖沼池、用水路、プール、その他というように分類しています。ほとんどの道府県では海が最多なのですが、東京都では従前から河川で起きる水難が最多となっています。2020年も件数73件中の最多は河川での59件と約8割を占めています。コロナ禍に見舞われていた2020年、感染防止を目的に多くの行動が規制されました。プール施設は閉場・閉鎖、海水浴場は開設せずという多くの方々にとっては辛い時期でした。子どももおとなも、水に対する対応力が減衰していったことは想像に難くありません。他方コロナ禍という状況下であっても、密接・密着・密集といういわゆる三密回避を理由に河川が規制されたケースは極めて少なかったと推測されます。海でも、海水浴場を除いては「規制/立ち入り禁止」というコントロールは極めて困難でしょう。いわんや、河川をコントロール下に置くことは困難だったと思います。つまり、例年の夏であればプールや海に出掛ける人々が河川に流れたと考えられます。川での危険性を正しく理解し、それを回避しながら川を楽しんでください。この川に学ぶという体験の延長線上には、近年多発する豪雨災害から命を護る行動があります。

練馬区内を流れる川には石神井川と白子川があり、両方とも国(国土交通大臣)が管理をする一級河川です。地表に現れているこれらの河川以外にも、かつては貫井川・中新井川・田柄川・千川等が流れていましたが、暗渠化により今は人々の視界には入りません。60年ほど前、私が住んでいた家(中村北)のそばを千川上水が流れていたことを覚えています。

文中の多摩川での行事のため、練水連は相当数のライフジャケットとヘルメットを整備しました。是非、練水連が開催する行事に参加して下さることを待っています。

